博　士（国際広報メディア）　平　塚　弘　明

学位論文題名

20世紀初頭の『Vogue』における「写真に対するまなざし」について

学位論文内容の要旨

本論文は、ある特定の領域における「写真に対するまなざし」、及びその変遷を記述するものである。

写真はその発明以来、様々な場面、様々な目的で用いられてきた。ある時は芸術の一領域として、作者の創造性を発露するための媒体として用いられ、またある時は記録媒体として、様々な資料や出来事を正確かつ克明に記録し保存するための道具として用いられた。そのため、写真が実際に使用される背景や文脈が、全く同じ「写真についての理解」を共有している保証はない。われわれが写真についてどのように考えるかは、それが使用され受容される文脈にも多くを依存していると考えられる。

本論文はこの観点に基づき、写真に写された意味を読み解くのではなく、芸術写真・広告写真・報道写真といった写真のサブジャンルを実質的に構成しうる、文脈または背景に焦点を向ける。それぞれのサブジャンルはそれ独自の利害／関心によって成立しており、それぞれが独自の理由で写真を用いていると考えられる。かかるサブジャンルを形成する文脈が持つ写真に対する理解を、本論では「写真に対するまなざし」と呼ぶこととする。この「写真に対するまなざし」とその変遷を記述することが、本論文の目的である。

本論文においては、「ファッション写真」と呼ばれるサブジャンルを研究の対象とした。したがって、雑誌媒体に用いられる写真、特にファッション雑誌に掲載される写真が研究の主たる対象である。具体的には、『Vogue』のアメリカ版の創刊から第一次世界大戦が始まる1939年まで、なかでも誌面の変化が急激に起こった1920年代を中心に取り扱った。

研究は以下のように進められた。まず、『Vogue』経営や編集実務に携わって人物の手による著述を基に、『Vogue』という雑誌の販売戦略や編集方針、さらにはイラストレーションや写真に対する彼／彼女らの基本的な理解を析出した。その後、実際の誌面や記事を分析し、（1）写真はどのような場面で用いられ、どのような役割を果たすことを編集者から期待されているか、（2）写真の役割や機能は、イラストレーションやテクストとどのように差異化され、またどのように共同しているか、（3）その写真の機能や役割（への期待）は、いかなる形で形式化されているか、（4）『Vogue』における写真の用い方及び写真の形式的特性や被写体の選択方法などを成立せしめる動機や関心、およびその変化の過程はいかなるものか、以上の問題を明らかにした。

分析の結果は以下の通りである。まず『Vogue』自体に、アメリカの美的・文化的質を向上させる意図があり、一方同誌はモードや芸術についての批評を行なず、公平で中立的な記述を意図して

いた。当然、掲載されるイラストレーションにも同様の目的を課していた。このような『Vogue』の基本姿勢は、当時の芸術観に基づいていた。当時の芸術観は、世界の開示という点において、写真を絵画より一段低いものとみなしていた。写真は絵画ほど美的質は作り出せず、世界についての真実の開示という点でも従来の芸術諸領域に劣る、手軽で便利な視覚的複製手段というような扱いをされていた。これが、20世紀の初頭の段階において、『Vogue』が有していた「写真に対するまなざし」であった。

この「写真についてのまなざし」、及びそれを支える芸術観は、1920年代を通して徐々に変化していく。その変化をもたらす要因は、３つの視点から述べることができると思われる。ひとつは『Vogue』自身の編集方針に基づく「図示」的な誌面構成への希求、もうひとつは異物を取り込もうとする文化の動き、そして最後に芸術作品の所有という契機の登場である。かかる『Vogue』自身の方針、そして同誌を取り巻く文化的状況の変化に伴い、従来からあった絵画と写真を差異化し前者の優位性を主張する芸術観は徐々に解体されていった。当然、かかる芸術観に基づいて成立していた「写真に対するまなざし」も変化し、それまでイラストレーションが専有してきた装飾的効果と精確な伝達という役割は、写真も同様に担うようになっていく。世界を開示する美的な手段としての絵画と、その劣化複製品であった写真という対立軸は、20年代を通してその意味を失っていった。

やがて30年代に入ると、写真は他の要素と共同して物語を語るようになる。そこに描かれる内容は、距離のある対象ではなく自らにより近い対象であり、さらには対象に対する編集者・撮影者の解釈であった。こうして、写真は撮影者や編集者が使いこなすべき道具のひとつとなった。ここに至り、写真と絵画はある点において平等性を確保することとなる。世界の開示とその伝達という点において、もはや写真は絵画をはじめとする芸術諸分野に劣るものではなくなり、新しい「写真に対するまなざし」が登場することになったのである。

このような「写真についてのまなざし」の変化の要因として考えられるのは、遠くのものを近くに引き寄せようとする欲望である。それは、未だ価値あるものを所有していない者が、何か新しいものに価値を見出すことで、それを所有しようとする過程なのだとも言い得る。写真という異物は、それまでの芸術観からは劣る地位に甘んじながら、そのような芸術観を生み出した文化的土壌の中に引き寄せられることによって、新たな位置づけを獲得していったのである。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　西　　昌　樹

副　査　　准教授　　西　村　龍　一

副　査　　准教授　　鈴　木　純　一

学位論文題名

20世紀初頭の『Vogue』における「写真に対するまなざし」について

審査に当たって去る2月2日に公開口頭試問を行い、著者による本論文の解説と1時間に及ぶ質疑応答の後、3人の審査担当者間で講評を行い、以下の報告がまとめられた。

本論文は、ファッション写真という分野における写真の役割とその変容を考察し、広告、報道、芸術などさまざまな分野における写真の役割についてのより深い理解を目指すものである。取り上げるのは世界で最も有名で、長い歴史を持つファッション誌「ヴォーグ」であり、ファッションのイラストと写真の重要性が変化する1920〜30年代を扱い、雑誌における写真の役割の変化を詳細に分析し、写真の役割が単なる撮影対象の提示ではなく、それが喚起するイメージがいかに編集戦略に関わっていたかを明らかにする。援用した方法論は視覚文化論であり、これは主として美術で用いられてきたものであるが、社会の特定状況における、媒体としての写真という視点から写真が本論文で論じられる。雑誌の目的・編集意図の分析からそこに掲載された写真の使用意図を時系列的に分析し、その変遷の意味を考察し、当該雑誌における写真の機能を詳細に分析している。

本論文の成果としては、ファッション誌で一番有名な雑誌における写真の役割の顕著な変化に注目し、その転回点における写真の扱いの変化を実証的、具体的に分析し、そこに見られる社会の影響、読者に働きかける編集方針を考察し、さらに写真の持つイメージの力とその利用を考察した優れた研究と認められる。また視覚文化論という、日本ではまだ一般に人口に膾炙していない新しい研究領域に基づいた本論文は、その研究領域の写真への応用として、新たな可能性を開く先駆的なものと言えよう。

口頭試問での質疑において主なものとしては以下のコメント、疑問点が提示された。

1．分析は実証的であるが、紙面構成についての時系列的分析に主眼がおかれ、ファッションという領域全体への言及が不足している。また1930年代で考察を終えているがその後の時代での変化はどうなのか。

2．この変化は現代のファッション写真とどうつながるのか。

3．他のジャンルにおける写真との比較がやや不足していた。

4．著者が影響を受けたミッチェルが提唱した、部分から全体像への考察にならって個々の優れた分析から全体を統合する写真論を志向してほしい、などである。

なお瑕疵であるが、本論文には表現、言葉使いの不統一が僅かだが見受けられた。

それらの意見に対して、本研究は厳密に範囲を設定して実証的に考察することを志向したこと、現代のファッション写真の展望は他の論文で取り上げる予定で、フォトジャーナリズムにおける写真の役割と比較して論じたいこと、実証から理論形成へのさらなる志向を持っていることなどが著者から述べられた。

本論文は以上のような点が指摘されたが、論文としてのまとまりとその実証的研究は優れた学術的成果であることは疑いがない。一部の審査委員からは第4章の自動車を扱った記事の写真分析が注目に値すると評価された。本論文は我が国における先行研究が少ない視覚文化論という新しい研究領域における貴重な論文と言えよう。さらなる研究の深化を求めるコメントは著者の研究に対する期待の表れでもある。

なお指摘を受けた誤字訂正や言葉使いの統一を行って、本製本して提出した論文を正式のものとする。

よって著者は、北海道大学博士（国際広報メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。